

第5回大賞(金の星賞)受賞作品

「カッパのはなし」

福島県 県立光南高等学校 三年 矢吹優衣



賢治のまちから
高校生★童話大賞

金の星賞

福島県立光南高等学校 三年 矢 吹 優 衣

『カッパのはなし』

カッパは人間が怖い。

生まれてからほんの数十年の子供の頃、通りすがりの馬にいたずらをしたら逆にとつつかまって、こてんぱんにやられてしまったのだ。その時の恐ろしさといったら、今でも頭の皿がギリギリ傷むほど。それからカッパは川から出ることを恐れ、川底に引きこもりつきりなってしまうた。

無邪気だった子供の頃とはまるで正反対の、暗くて陰険な眼差し。世間一般に愛されているカッパの面影などみじんも感じられない。

川の生き物たちは、こんな風になったカッパを初めの内は心配して励ましたり勇気づけてくれていたが、次第に諦め無関心になり、今では無視をするか馬鹿にするようになっていた。

カッパももうそんなのは慣れっことで、毎日ごろごろ寝ては魚を食べ、また寝ては時々泳ぎに行く日々を送っていた。大好物のキュウリを食べたのだった、もう遠い昔のことだ。

今、カッパは大人になりかけている。生まれた頃のこともよく思い出せないくらい、月日は流れ歳をとっていた。

きっと人間の世界はすっかり変わっているのだろう。あのときの人間だつてとつくに死んでしまったし、もう恐れるものは何もないのだ。

けれどカッパはまだ人間が怖かった。あの時のような目に遭ったらどうしよう。

今度こそ逃げられないかも。時々地上に上がってことを考える。しかし、いつも恐怖が先だち、簡単に諦めてしまう。

このままでいいよ。わざわざ行く必要はない。このまま平穏な生活を、い

つか消える日まで繰り返せばいいんだ。

友達が少ないし、陰口は叩かれるし、毎日フナしか食べないし、おまけに近所のカワウソには毎日小言をされるけれど、外に出ることに比べたらずっとマシだ。カッパには仕事なんてないし、川の中でひっそりと生きて行くのが自分らしいんだ。

と、今日も昼過ぎまで寝ていたカッパは、顔を洗いながら自分に言い聞かせた。もう食べ飽きたフナを平らげると、ボケーっとしながら水中の様子を眺める。

ほんの少しにごった灰水色の水中。ゆったりと流れる水は、秋から近いせいかこの間よりも冷たくなっていった。少し先をコイが泳いで行く。タガメやミズスマシが水面に向かってチョロチョロと上っていく。カッパの家の周りには水草がもつさり茂っている。外から見えにくいようにわざと増やしたのだ。

何匹か小魚が通ったが、誰もカッパの方を見向きもしない。この川の中でカッパの存在は、もしかしたらミジンコより薄いのかも知れない。ミジンコはミジンコで色々役に立っているから、カッパよりも格上である。ミジンコ以下。

カッパは誰の役にも立っていない。

なんだか憂鬱になってきたので、カッパはまた寝ることにした。

自分なんて、さっさと消えてしまえばいいのに。

カッパは厳密にいうと、普通の生き物みたいに死んだりはしない。病気にもならないし、カッパには万病に効く秘薬が作れる。カッパが死ぬのは、そのカッパの存在を誰も知らなくなった時だ。

カッパの存在を、人間が一人でも信じていれば、カッパは消えることがない。逆に、それまでカッパは死ぬことができない。どんなに辛くて逃げたくても、カッパは自分の意志では死ねないのだ。

ということは、まだ誰かが自分の存在を信じているということ。

カッパはそれを思いついて、なんだか複雑な気持ちになる。自分は一体人間にどんな風に思われているんだろう。悪者にされているのか。間抜けな奴と思われているのか。

ブルツと体が震えた。あの恐ろしい人間が自分を覚えていて、もしも捕獲しようと思えばいたら。川まで追いかけてきたら。

そんな馬鹿みたいなことを考えていたら、誰かがやってきた。

「いないの？ 勝手に邪魔するよ」

聞き慣れた声が出て、カッパの寝床まで誰かが泳いでくる。顔を上げると、唯一の友達のヒキガエルが間抜けな顔で平泳ぎをしていた。

「・・・おはよう」

「うん。お邪魔していい？寝てた？」

「別に。いつも通りさ」

ヒキガエルは見た目こそ醜いけれど、性格は穏やかで気のいいヤツだ。カッパよりずっと小さくて歳も若い、卵の頃から知った仲である。見た目も似ているし、なんとなく二人は馬が合う。こうやって何気ない会話をしたり、ぼけーっとして過ごすのだった。

こんな陰気な引きこもりガッパを相手にしてくれるのは、ヒキだけだ。例えばカッパを忘れてしまったって、ヒキがいればかまわない。

そんなこと、本人には言えないけれど。

「あのねえ、ブルーギルのヤツが、またメダカちゃんをいじめたらしいよ。本当にやなヤツだよねえ」

「あいつ、余所がいくから来たくせに。ちょっと強いからって威張り散らして。メダカは弱くておとなしいからな」

「あとねえ、ナマズのおっさんがねえ、明日大地震がくるって騒いでいるみ

「ただよ」

「しよつちゆうそう言ってるけれど、きた試しがないよな。飲み過ぎだ」
二人並んで水中を見つめながら、たわいもないことをはなした。

昼頃フナを捕りに行った帰り、運悪くカワウソ姐さんにつかまった。

「ちよいとアンタ、何コソコソ隠れようってんだい。このあたしから逃げようたってそうはいかないよオ」

鋭い眼でにらめつけられ、臆病なカツパは泣きそうになる。この年増のカワウソは、どうも妖怪じみていてカツパは苦手だった。気の強いヤツが苦手なのもあるし、会う度にお前はダメだの社会脱落者だの、カツパをボロクソにけなすので、できれば会いたくないのだ。

「べ別に・・・あの俺目が悪いから」

「何言ってるんだいこのカツパは。アンタ三十間先の小ブナのウロコまで見えるくせに。それより爺さん見なかったかい、あのカメまたどっかに行っちゃまったんだ」

爺さんというのはクサガメのことである。カツパの記憶では子供の頃からのので、かなりの長生きだ。カメは万年というが、もしかしたら本当かも知れない。

「知らないです・・・痛い、離してえ」

姐さんはつかんでいたカツパの頭を乱暴に離すと、舌打ちをしてさっさと行ってしまった。

亀は最近認知症らしい。

家に帰ると、そのカメがのんびりとくつろいでいるではないか。ヒキと仲良く語りながら。

「あ、カツパ、おじいさんがいらっしゃってるよ」

「・・・爺さんカワウソの姐さんが探してたぞ。勝手に出歩いちゃダメだろう」
カメは首をゆっくりと傾げて、固まったと思うとまたゆっくりと首を戻し

た。

尻尾から長い藻が生えている。福を呼びそうなありがたい姿だ。

「はあ？ ああそうじゃのう、今日もいい天気じゃなあ」

「いやそうじゃなくて」ワシはカワウソよりイタチの方が好みじゃ」

「誰も訊いてないし、姐さんが聞いたら怒るし」

カッパはカワウソがいなか辺りを窺う。怒らせたなら何をされるか。昔から狸や狐と並んで人間に妖怪扱いされてきた生き物だ、何だかカッパよりも強そうである。

何を言ってもさっぱり通じないので、しばらく放っておいたらその内姐さんが現れた。カッパは帰り際キツイ言葉を浴びせられた。

「アンタ、本当にこのままでいいと思ってるのかい？ 天下のカッパ様なんて様だい。かつては水神様ともされたカッパも、今じゃただの臆病者の引きこもり！ 同じ水の怪としてあたしゃ恥ずかしいよ。たかが人間に捕まったくらいで何だつてんだ。カッパ失格だよッ」

カッパは姐さんの怒鳴り声に何も言い返さず、ひたすら押し黙っていた。その姿に余計腹を立てた姐さんは、カメをかかえて去ってしまった。

しーんとした場を取り繕おうと、ヒキが精一杯明るく言う。

「あのさ、姐さんも本当はカッパを心配してくれてるんだよ。同じ妖怪だし。キツイ言葉でやる気出せようとしてるんだよ。だからあんまり気にしないで、カッパだっていっぱい悩んでるんだもんね」

ヒキはそう言ってくれるが、カッパにもちゃんとわかっているのだ。姐さんが根は優しいカワウソだということも、爺さんがたまに訪ねて来ては、相手をしてあげていることも。

そして、本当はヒキが一番カッパの回復を願ってくれていることも。

でも、できないものはできない。怖いものは怖いのだ。今までカッパだった何もしなかったわけじゃない。

カップが黙っているのを見て、ヒキは諦めたように帰って行った。帰り際、ぼつりとこう言い残して。

「あのね、地上せかいは昔とすっかり変わったんだ。カップの見たことないものがいっぱいあるんだよ。人間もずいぶん変わったんだよ。変わらないのはカップだけだ。

……僕、カップに見せたいがあるんだ。一緒に見たいものが」
カップは何も答えなかった。

ぼんやりしているうちに日はあつという間に暮れた。その夜の川は、月の光もなくとも冷たかった。

翌日の朝、カップは姐さんの大声で目を覚ました。

「起きろカップ！ 大変なんだよ、アンタのダチが人間にとっつかまったんだッ」

寝起きの悪いカップが、一瞬にして覚醒した。

ヒキが捕まった？

「に……人間に？」

ウソだろ、と言いかけて、姐さんの真剣な顔を見たら口ごもってしまった。本当なんだ。

「人間がなんでヒキを」

「ヒキガエルっていえば解剖って相場は決まってるじゃないか。あのお人好、鈍くさいからねえ……まずいよアンタ、あのカエル開きにされちまう」

「ひ、ひひひらッ」

カップは真っ青になった。たった一人の友人が、あの優しいヒキが、恐ろしい人間の餌食に！

カップは慌てふためくが、どうしていいのかわからずただオロオロする。ヒキ、ヒキ。どうしようウソだろう、ああこれが夢だったらどんなにいいか。

どうして昨日あんな冷たい態度をとってしまった。ヒキの気持ちを考えずに、自分勝手なことばかりして。

取り乱したカッパを見かねて、姐さんが思いつきり腹を叩く。

「落ち着くんだよこのダメカッパ！さっさと助けに行かないか、アンタの友達だろうッ」

「た・・・助けに？で、でも俺なんか・・・」

そうだ、自分なんかよりも頼りになる者がいるはずだ。強くて勇気のある、他の誰かが。

でも、そんなヤツがどこにいる？そんな都合のいいヤツが。

ヒキ。どうしよう。自分はまだ迷ってる。大事なきみがピンチだというのに、まだここから出ることを恐れているんだ。

こんな自分に何ができるんだよ。弱虫で臆病なカッパ失格の自分に。友達失格の自分に。

カッパは水上を見上げた。水は光を浴びて水晶のようにキラキラしているし、魚はいつもと変わらず泳いでいる。

こんな一大事が起こっているのに、世界は何も変わっていない。

ひどい。ヒキがどうなろうと、世界は気にもとめない。自分のことだってそうだ、きつとカッパがどうなろうとみんなどうだっていいんだ。カッパがいようとまいと、世界は何も変わらない。

こんな世界のどこに、他にヒキを救ってくれるヤツがいる？

みんな自分以外のことには無関心だ。自分はひとりぼっちだ。カッパはずっとそう思っていた。

だけどヒキだけは違う。こんな自分に笑いかけてくれる。そばにいてくれる。だから自分は完全にダメにならずにいられた。

ヒキがいたからカッパはカッパでいられたのだ。

姐さんが、いつになく静かな声でつぶやいた。

「カッパ、アンタはカッパなんだよ。川一番のイタズラ者で相撲の好きな、妖怪カッパなんだ。そのアンタより強い生き物なんて、この川にはいないんだから」

「姐さん……俺を、背中から蹴っ飛ばしてくれないかな」
カワウソはカッパの目をじっと見つめた。いつもと同じ間抜け顔だが、目の奥に決意を感じた。足がガクガク震えているくせに。

姐さんの口元がクスリと笑う。

「よおし、いい度胸じゃないか。後悔するんじゃないよ」
姐さんは思いつきりカッパを蹴っ飛ばした。

その日、川辺でくつろいでいたカモの親子は、突然川から飛び出してきたヘンテコな物体にびっくりして、大あわてで飛んでいったそうだ。

あとには水面にプカプカ浮く緑色の甲羅と、大きな古カワウソがいた。

「……手加減で言葉知ってる？」

「何甘ったれたこと言ってるんだい、早く行くよ、時間がない」

姐さんの馬鹿力のおかげもあり、ついにカッパは、本当に何十年、いや百年振りに川を飛び出したのだった。

勢いよく水面から外へ出た時の興奮と快感で、まだ胸がドキドキしている。強い日射しに目がクラクラした。懐かしい匂い、遠くに広がる山々、そして世界を覆う果てなく澄んだ青空。

そんな感動にひたる暇もなく、カッパは慣れない二足歩行で姐さんの後を走った。

草を分け入ってたどり着いたのは、古い祠だった。あの川の水神様を祀ったものらしい。

その前にはカッパにとって、この世で一番恐ろしい生き物が立ちはだかっていた。

人間だ！

その鬼のような形相と大きな体に、すっかりカッパは震え上がってしまう。さつきまでの勇氣はどこかへ吹き飛んだ。

「ふん、カッパじゃねえか。まだいたんだなこの辺にも。おどろいたな」
凶太い声に背筋が凍る。

怖い。ダメだ、やっぱり怖い。

人間の後ろに透明な箱があった。中ではヒキが弱りきった目でカッパを見つめている。ドキリとして、カッパはぐつと背筋を正す。

そうだ、ヒキを助けなくては。

弱気になってはいけない。こいつらからヒキを取り戻すんだ。そのために自分は、川を飛び出したんだから。

キツと気合いを入れ、人間をにらみつける。

怖いのに変わりはないが、それでも体の震えは収まった。カワウソ姐さんが、間に入る。

「こいつはアタシらの中でも有名な悪党で、たくさんなにかまの獣が捕まってるんだ。でも多少は話のわかるヤツで、勝負に勝てば見逃してくれるってさ」

「おいお前、こいつを取り戻したいんだって？ だったら俺と相撲で勝負だこう見えて俺は力自慢なんぞな。カッパに勝ったなんていい自慢の種じゃねえか。もしもお前が勝ったらこいつを離してやる」

「ほ、本当だなっ」

「当たり前だ。しかし俺が勝ったら、お前の頭の皿と、カッパ伝来の秘薬とやらを寄こせ」

さ、皿を！ おまけに家宝の秘薬まで！

「どうする、止めるなら今だ。こんなカエル放っておけばいいじゃねえか」
人間は自信ありげに笑った。その太くて丸太のような腕は、本当に強そうだ。

カッパは最悪の状況を創造する。ヒキも救えないばかりか、自分の命も危うい。

しかし逃げることだけはできない。もうカッパは逃げないことに決めたのだ。

それに死んだら死んだで本望だ。皿くらい何枚でもくれてやる。

そのとき姐さんが、何かをカッパに投げて寄こした。

緑色のつややかな。

「キュウリ・・・？」

カッパの大好物。もう何十年も食べていない。

姐さんは照れくさそうに、尻尾を振る。

「人間のところからちよろまかしてやったんだよ。アンタみたいなヒヨロヒヨロ、何か食べなきゃ力出ないだろ」

「姐さん・・・」

震えて冷たかった胸が、ギュツと溶け出していく感じがした。

カッパはその青々としたキュウリを、ガブリとひと嚙りした。

おいしい。

泣きそうになるのをこらえ、すっかり食べてしまったカッパは、ようやく人間と向き合った。

即席の土俵の上で。

「行くぞカッパ野郎」

「来てみる、人間」

カッパは何だかもう自分が本当のカッパになれたような気がした。そうだ、自分はカッパなんだ。カッパは。

「はっけよい・・・のこった！」

姐さんの声で二人は同時に動いた。そして勝負はすぐについた。まるで川のような緩やかな動きで、カッパは軽々と人間を投げ飛ばしていた。

人間は頭から地面に倒れ込んだ。どうして、という表情のまま。
なぜって。

カッパは、相撲が大得意なのだから。

昼間、川の生き物たちが活発に動き出す頃、二匹は並んで河原を歩いて
いた。

まだ完全に地上が平気になったわけではないカッパは、最近少しづつ川か
ら離れられるようになってきていた。ヒキとの、一緒に「クルマ」とかい
うものを見にいこう、という約束を果たすために。

「ホントによかった、もしかしてダメかも知れないと思ったけどさ、あいつ
もなかなかやるじゃないか」

そんなカッパの様子を、カワウソの姐さんとその腕に抱かれたカメが、祠
の前から見届けていた。その隣にぼんやりと、白くやわらかな光がたたず
んでいる。

「でも気づかないもんかね。あんなにうまいこといくなんて、とか、ちった
あ疑ったっていいものを。わざわざ水……ええ、そんなもんですか。
終わりをければなんとやら、ってやつですかねえ」

ねえ、アンタのことを心配してたのは、何も川の仲間だけじゃないんだよ。
姐さんは心の中で語りかけた。